

用ソフトウェアに移し、Ⅲ級群本人と矯正医に理想側貌になるよう描画してもらう。移動前の顔データと本人の描画した理想顔、移動前の顔データと矯正医の描画した理想顔での変化量をそれぞれ計測した。計測を行う部位はLs（上唇点）、Stm（ストミオン）、Li（下唇点）、Sb（オトガイ唇溝）、Pogs（軟組織ポゴニオン）の5つの部位とした。それぞれの理想顔での変化量をMann-Whitney U testにより比較することで、Ⅲ級群の理想の違いを把握することとした。

【結果・考察】Ⅲ級群と矯正医群の理想顔貌を比較した結果、Ls（上唇点）とStm（ストミオン）、Li（下唇点）で有意な差を認め、Sb（オトガイ唇溝）とPogs（軟組織ポゴニオン）では有意な差を認めなかった。このことは、Ⅲ級群の理想とする側貌は矯正医群が理想とする側貌より上下口唇部を前方に位置させた側貌を好むこと。オトガイ部の位置は・級群と矯正医群で同じ理想であることを示唆している。Ⅲ級群の理想はオトガイ部を後方に位置させる報告が多い。我々の今回の結果ではⅢ級群のオトガイ部の理想は矯正医群と有意な差を認めなかった。しかし、上下口唇部を突出させる傾向を認め、上下口唇部とオトガイ部に大きな差を認めた。矯正医は顔全体のバランスを評価する傾向にあるが、Ⅲ級群の理想顔貌は顔全体に対するオトガイの位置ではなく、上下口唇部に対するオトガイの位置でバランスを評価していると考えられる。

【結 論】Ⅲ級群は上下口唇部に対するオトガイの位置でバランスを評価していることが推察された。

5) 凝固モード炭酸ガスレーザー照射後ラット顎二腹筋の組織変化

○加藤 美菜

（奥羽大・大学院・口腔病理）

凝固モード炭酸ガスレーザーを照射された筋組織の反応は充分には解明されていない。本研究では、凝固モード炭酸ガスレーザー照射を受けた筋組織に生じる変化を病理組織学的、および、免疫組織化学的に検討した。

実験ではラット顎二腹筋に凝固モード炭酸ガス

レーザーを照射し、同部の電気メス処置を対照とした。照射後、経時的に組織を採取し、パラフィン切片を作製した。病理組織学的検討の後、アクチンに関与するHsp27に対する抗体、熱刺激により誘導されるHsp70に対する抗体、および、筋細胞マーカーであるデスミンに対する抗体を用いた免疫組織化学的検討を行った。

レーザー照射直後に照射部位は壊死に陥り、照射6～12時間後では壊死巣辺縁部の筋線維は断裂していた。1日後の壊死巣内部では、紡錘形細胞が少数みられ、3日後では、壊死巣内の紡錘形細胞は数を増していた。5～7日後の壊死巣には多数の再生筋線維がみられ、レーザー照射後10日では、再生筋線維は太さを増し、壊死組織は消退していたが、電気メス処置では処置後14日において壊死組織が残存していた。

DesminとHsp27の染色性は照射直後～12時間後の壊死巣で消失していた。1日後以降の壊死巣には、Desmin陽性の紡錘形細胞がみられたが、Hsp27陽性細胞はみいだされず、Hsp27は照射後10日の太い再生筋線維に局在していた。Hsp70陽性反応は照射後12時間～3日において、壊死巣と正常筋組織の境界部でみられた。

以上の結果から、レーザー照射後1日から幼若な再生筋細胞が壊死巣に出現し、それら再生筋細胞は成熟するとHsp27陽性となることが示唆された。また、レーザー照射後筋組織のHsp70局在状況は、レーザー照射後歯肉におけるHsp70の局在状況と同様であること、および、電気メス処置後の治癒期間と比べ、レーザー照射後の治癒期間が短いことが確認された。

6) 下歯槽神経損傷部への嗅粘膜移植

○河西 敬子¹、高田 訓²、大野 敬²

（奥羽大・大学院・顎口腔外科¹、奥羽大・歯・口腔外科²）

【目 的】嗅粘膜は嗅上皮と粘膜固有層からなり、嗅上皮には嗅神経に分化する幹細胞が存在し、粘膜固有層には嗅神経の周囲に軸索再生を誘導・促進する嗅神経鞘細胞（OEC; Olfactory Ensheathing Cell）が存在する。これらは高い新能力と自己増殖能を有しており、脱髄軸索を再有髄化するとして近年臨床応用が試みられている。そこで、嗅粘